

# 幼稚園六十年

倉 橋 惣 三

本年本月は、我が國に幼稚園が創設せられてから六十年に當る。

明治八年七月七日、時の文部大輔田中不二麿氏から太政大臣三條實美公に宛て、幼稚園開設の伺ひを立てられたのが、幼稚園の名に於て幼児教育施設の必要が公に唱導せられた最初である。その以前フレイベルの幼稚園説を傳へて、幼児教育の施設が行はれたこともあり、その論を立てられたが、幼稚園の開設が建議せらるゝに至つたのは、これを以て始めとする。八月二日、右の伺は聞届け難しとされたが、八月二十五日再應伺が提出せられ、九月十三日に至つて、伺の趣聞届けられた。そして東京女子師範學校(お茶の水)内に新しく園舎が建築せられ、愈々、明治九年十一月十四日幼稚園開設の布達が文部省録事によつて布達せられ、同十六日開園せられたのである。(布達の日を以てすれば、開設は十一月十四日であるが、實際に開園せられたのは十六日である。その意味に於て、幼稚園開園記念日は十一月十六日となつてゐる)。

思へば、随分古いことであるが、當時の我國の教育界は、實に新しい意氣に活潑な時であつて、明治五年學制頒布から僅に四年にして、既に、學齡前教育施設の端を開いたのである。その進歩的精神に深き敬意を拂はざるを得ない。而して、時の東京女子師範學校攝理(校長)中村正直氏、文部大輔田中不二麿氏、その他がこの事に當られた、文部省内及び學校内の先覺者諸氏の優れたる識見と熱意とを、永く記念しなければならぬのである。

爾來、我國の幼稚園發達史は第一期の新鋭期、第二期の沈滞期を経て、大正十五年の幼稚園令公布後を第三期の發展期

とすることが出来る。而して、今や、實に盛なる趨勢に入つてゐるのであるが、その盛なるはたゞに數の普及に止まらない。六十年間の文化の進展に伴ふに、その方法も内容も、更に社會的意義さへも、面目を一新し來つてゐるのである。勿論、これを以て満足すべきでなく、多々改善充實せられなければならないのであるが少くも傳襲の隋性に停頓せざらんことを意氣は、今日に於て大に、顯著なるものがある。聊か以て、六十年の歴史に面目ありとすべけんか。

幼稚園六十年。その始めを思ひ、今を省み、將來を期し、茲に、斯の教育のために心を新たにするものである。

#### 幼稚園開設之儀 (明治八年七月七日)

「方今小學校の設立漸に加はり學齡子女就學の途相開け、授業の方法稍々端緒に就き候得共獨學齡未滿の幼稚に至つては、誘導の方其宜を得ざるが如く、教育の本旨に副はず頗る缺典ミ存候、因て這回東京女子師範學校内に於て幼稚園を創置し、茲に幼稚の子凡百人を入れ看護扶育以て異日就學の階梯ミ致度、尤右費用は當省定額金を以て措辦可致候條仰被可候也

#### 再應伺 (明治八年八月二十五日)

「本年七月七日附を以幼稚園開設の儀相伺候處同八月一日附を以伺之趣難聞届候段御指令相成然る處右幼稚園の儀は兒輩の爲め良教師をして専ら扶育誘導せしめ遊戲中不知不知就學の階梯に就かしむるものにして教育の基礎全く茲に立つべく逐次學の擴張の際先づ於當省實地此雛形を設け漸其方法に因らしめん事を欲する旨趣にして即今不可缺之急務速に施設相成度尤女子師範學校内建家兼用致し當分之内費用等該校補助金を以辨償可致候條開設之儀御允許相成度此段更に相伺候也

#### 開設布達 (明治八年十一月十四日)

東京女子師範學校内に於て幼稚園開設候條此旨布達候事

文部大輔 田中不二 磨代理

文部大丞 九鬼隆一